

障害者サービス実践事例①<知的障害者・高齢者等>

2009年12月8日 あずま図書館 山内

1, 墨田区の障害者サービスの経過

- 1974年 身体障害者サービス小委員会を設置
- 1976年 視覚障害者への市販テープの貸出開始(資料を自宅に届ける宅配の実施)
- 1977年 墨田区盲人福祉協会発行月刊テープ「声のたより」と共に図書館の市販テープを郵送貸出
千葉県船橋市の拡大写本グループフェルト会より拡大写本の寄贈を受ける
- 1978年 朗読者養成講座を開催
- 1980年 対面朗読講習会開催(対面朗読サービスの開始) 拡大写本講習会開催
- 1981年 拡大写本サービス開始
- 1982年 「墨田区立あずま図書館拡大写本目録 昭和57版」刊行
- 1983年 「録音図書目録 墨田区立図書館 1983. 3」刊行
- 1989年 「すみだ声のたより」(月刊テープ)に図書館からの知らせを掲載
- 1990年 漢点字講習会を開催
- 1993年 ふれあいセンター高齢者住宅シルバーピアでの貸出開始
「墨田区立図書館拡大写本蔵書目録 平成5年(1993年)版」刊行
- 1997年 特別養護老人ホーム「清風園」での個人貸出開始、老人保健施設「秋光園」への団体貸出開始
- 1998年 すみだふれあいセンター福祉作業所での貸出開始
江東橋4丁目都営住宅内の老人会「友和会」への貸出開始
- 2000年 特別養護老人ホーム「なりひらホーム」での貸出と紙芝居開始
- 2002年 ふれあいセンターことぶき作業所への貸出
清風園で紙芝居、お話、歌などをはじめる
- 2003年 特別養護老人ホーム「同愛記念ホーム」での貸出と紙芝居、お話、歌開始
「秋光園」での貸出と紙芝居、お話、歌開始
- 2004年 知的障害者授産施設「さんさんプラザ」での個人貸出開始
特別養護老人ホーム「たちばなホーム」での貸出と紙芝居、お話、歌開始
不登校児のための「ステップ学級」への団体貸出開始
「秋光園」「福祉保健センター」のデイ・サービス・センター2カ所で紙芝居と歌を始める
- 2005年 老人保健施設「櫻川」で紙芝居と歌を始める
「ステップ学級」でのブックトーク
- 2006年 DAISY講習会を開催(以後毎年開催)
- 2008年 デイサービスセンター「シルバープラザ梅若」で紙芝居と歌を始める
- 2010年 墨田福祉作業所での貸出開始

2, 知的障害者・高齢者サービス <資料4>施設個人貸出・催し物参加者統計

(1) 知的障害の方へのサービス

1. ふれあいセンター福祉作業所での貸出

1995年より貸出をはじめた「ふれあいセンター高齢者住宅シルバーピア」(7階)と同じ建物に福祉作業所があり、何とかサービスをしたいと、1998年6月に見学。一緒に作業をするなどした。翌7月から貸出開始。はじめは3時の休憩時間に3階の食堂で貸出をはじめたが、時間が短いこと、4階で作業している車いすの人などは3階に来ないことなどから、1999年3月より昼休みに貸出するようになる。2000年より貸

出が落ち着いてきた12時半頃から紙芝居を開始。

2. 墨田さんさんプラザでの貸出に向けて

墨田さんさんプラザ見学報告

2004年5月7日(金)に、4月1日オープンしたばかりの知的障害者授産施設「墨田さんさんプラザ」を見学。ふれあいセンターでの貸出状況の映像を見ていただく。

事前に図書館利用について説明してほしいという施設側の要望があり、8月17日にチラシを作って説明に行く。9月9日から毎月第2木曜日の昼休みに貸出を行うことになる。

3. 来館してくれる利用者へのサービス、付録：職場体験実習

- (1) 社会参加の場となっている。そして何よりも楽しめる場になっている。
- (2) 個人として受け入れられる場、自分の興味や関心に沿って自由に話したいことを話せる場になっていて、様々な要望を出すことができる。
- (3) 社会との関わりの接点になっている。
- (4) マルチメディア・デージーなど特別な資料に触れることのできる場。

4. 特別支援学級でのサービスと公開授業

図書館の情報誌「みどり」(学校訪問を紹介した号)を見てみどり学級の担任が、うちの学級にも来てくれるかと来館。2003年4月より月1回第2木曜日の朝、読書の時間に訪問して30分ほど絵本を読んだり、紙芝居をしたりする。在籍者は2003年度5名(当初4名)、2004年度6名、2005年度6名、2006年度6名。

2006年2月14日の研究授業は「かいじゅう」というテーマで図書館と先生方が協力してやることになった。怪獣の本の紹介と「かいじゅうたちのすむところ」「つきよのかいじゅう」などの読み語りをした後「三匹のやぎのがらがらどん」の人形劇を全員参加でやる。1月のみどり学級の時にK君が「さんびきのやぎのがらがらどん」のトルロの出てくるページを見ていたので、彼の参加が見込めると考えた。また、「かいじゅうたちのすむところ」のパズルを作成し、事前に絵本に慣れてもらって字用配慮した。当日は大阪など全国から多くの教員が見学に来た。(『みんなの図書館』2006年6月号「みどり学級での公開授業」参照)

課題

- (1) すべての人へのサービスという意味で、地域に公的施設としての図書館が存在し、知的障害などの人に様々な援助を行うことの意味は大きい。
- (2) 知的障害者の授産施設といっても単に知的障害というだけではなく、自閉的な人や学習障害ではないかと思われる人など様々である。従って、資料利用などのあらゆる可能性を試みる必要がある。
- (3) 漫画の利用、CDの利用、アニメ系の本の利用など資料選択の幅を広げる必要がある。
- (4) ピクトグラム(絵文字)などを利用して、よりわかりやすい利用案内や書架案内などを考える必要がある。

特別支援学級へのサービスは多様な工夫の中で展開する必要がある。また、教師との連携が不可欠である。

3. 高齢者へのサービス

(1) 特別養護老人ホーム・デイサービスセンターでの貸出と紙芝居等

緑図書館の職員が、特別養護老人ホーム「清風園」にボランティア研修に行ったことがきっかけとなり、貸出や紙芝居、お話、歌などのレクリエーションなどの出張サービスがはじまった。

1) 清風園

開始時期 1997年9月 訪問頻度 月1回第1木曜日午後2時から3時

経緯 墨田区立緑図書館の職員がボランティア研修に行き、図書館資料の宅配による借受希望者を開拓。1998年4月から、定期的貸出になる。2002年3月からボランティア・グループ「つくしんぼ」と協力して紙芝居、お話、歌等のレクリエーションを定期的に行う。2004年6月から手品の毛利さんが参加。

担当 貸出は緑図書館、行事はあずま図書館が協力

2) なりひらホーム

開始時期 2000年7月13日見学、7月26日より開始。 訪問頻度 月1回最終水曜日11時から

4階と3階の2カ所で実施

経緯 2000年の開館直後に図書館資料団体貸出を開始、その後紙芝居の上演を行うようになる。図書館資料貸出担当は横川コミュニティ図書室で、あずま図書館も協力している。紙芝居やお話、歌等のレクリエーションを定期的に行う。2003年1月より4階と3階の2カ所で紙芝居・歌を行う。

担当 貸出は横川コミュニティ会館図書室。紙芝居と歌はあずま図書館。2005年4月より横川コミュニティの全面委託化に伴い、貸出担当は横川コミュニティとあずま図書館になる。

3) 同愛記念ホーム

開始時期 2003年2月 訪問頻度 月1回最終水曜日午後2時より

経緯 障害者サービスPR用のチラシを作成した折、各施設にPRに伺った。同愛記念ホームに伺った時担当の人から「こういう社会資源があるのを知らなかった」といわれたことが印象に残っている。デイ・サービスの方も参加することもある。資料を借りる方の半数もデイの方。2003年2月からボランティア・グループ「つくしんぼ」と協力し、紙芝居、お話、歌等のレクリエーションを定期的に行う

担当 緑図書館。

4) たちばなホーム

開始時期 2004年10月14日 訪問頻度 月1回第2木曜日2時から3時

経緯 開設当初障害者委員会で訪問し以後団体貸出を実施していたが、資料の紛失が非常に多いこと、施設での個人貸出が増えてきたことなどから、あずま図書館で訪問し個人貸出を開始する。区内各地域館の障害者サービス担当者により、紙芝居、お話、歌等のレクリエーションを開始。

担当 貸出はあずま図書館。八広の職員の応援で紙芝居と歌を実施。

5) 老人保健施設(秋光園)

開始時期 2003年9月 訪問頻度 月1回最終火曜日午後2時より

経緯 秋光園開設間もなく1997年7月に園の職員が緑図書館を訪れ団体貸出の要望がある。図書館では300冊の本を3ヶ月間定期的に団体貸し出しする。団体貸出用の本は1階のフロアにある本棚に並べられ「赤とんぼ文庫」と称して借りる人はノートに個人名と本の名前を書いて利用するようになっている。

その後2003年9月から2階入所者を対象とした個人貸出を開始、併せて紙芝居、お話、歌等のレクリエーションを行う。2004年2月からは痴呆入所者の多い3階でも紙芝居と歌をはじめ。

担当 緑図書館

6) 老人保健施設(櫻川ケア・センター)

開始時期 2005年9月 訪問頻度 月1回第3火曜日午後2時より

経 緯 視覚障害利用者T君のお母さんがヘルパーとして勤務。お母さんを通じて、是非来て紙芝居などをやって欲しいと要望がある。8月に見学に行き、翌月から実施。

担 当 寺島図書館、緑図書館、あずま図書館

7) デイ・サービス(秋光園)

開始時期 2004年10月 訪問頻度 月1回午後1時半～2時半(曜日は固定せず)

経 緯 秋光園には毎月1回個人貸出と紙芝居・歌を実施していたが、デイ・サービスからも要望があり月1回訪問するようになる。個人的な本の注文も受け付けている。デイは曜日によって参加者が変わるため、毎月曜日を変えて訪問している。

担 当 緑図書館・あずま図書館

8) デイ・サービス(福祉保健センター)

開始時期 2004年11月25日 訪問頻度 月1回午前10時半～11時半(曜日は固定せず)

経 緯 旧知のデイ・サービスセンター所長からの依頼で紙芝居と歌をはじめようになる。こちら毎月曜日を変えて訪問している。

担 当 寺島図書館、八広図書館

9) デイ・サービス(梅若シルバープラザ)

開始時期 2008年3月4日 訪問頻度 月1回午後1時半～2時(7月から第4木曜日)

経 緯 高齢者協力者の方と梅若の職員が同じ団地に住んでおり、協力者を通して是非来て欲しいという要望があった。

担 当 寺島図書館、八広図書館

(2) 老人会、高齢者住宅などでの貸出

1) 都営住宅(江東橋アパート)の老人会「友和会」

開始時期 1998年11月 訪問頻度 月1回第1水曜日11時～11時45分

経 緯 1998年10月に江東橋アパートの居住者からの要望があり、翌11月から開始。緑図書館の資料を団体貸出用ケース6～7ケースで運送業者に運搬してもらい、図書館職員が現地で受け取り、貸出を行う。

2) 「ふれあいセンター高齢者住宅シルバーピア」

開始時期 1993年7月 訪問頻度 1当初は第3水曜日の午後3時から4時

経 緯 ふれあいセンター開設準備を行った区の住宅課の担当者の中に元図書館員がおり、その職員から、シルバーピアのお年寄りに本を貸し出してもらえないかとの強い働きかけがあり、開設2ヶ月後の1993年6月に、図書館員2名(団体貸出し担当と障害者サービス担当)、住宅課職員1名が、シルバーピアへ出向き、集会室で入居者への説明会を持った。図書館側からは、どんなサービスができるか書いたチラシを持って行き、その結果、店開き方式で翌月の7月から貸出しすることが決まった。現在は高齢者住宅入居者と管理人の家族が利用している。

(3) 高齢者福祉課の支援センター会議におけるプレゼンテーション

(4) 高齢者サービスのための資料

- 1, 拡大写本
- 2, 大活字本
- 3, 布の絵本

(5) 本を読むことが困難な利用者にも図書館サービスを！

- 1, 紙芝居ともの
- 2, 街頭紙芝居
- 3, 子どもの声
- 4, 絵本とお話
- 5, 歌と手遊び
- 6, 手品

(6) 高齢者サービス協力者養成講習会（全6回）

高齢者サービス推進計画(山内私案)

今後10年以内に65歳以上になる、いわゆる団塊の世代は今までの高齢者像を大きく変え、多様な価値観とライフスタイルを持つ高齢者が増えると予想されます。ある調査(『団塊の世代300名に聞けリタイア後のライフスタイルと住環境』(積水ハウス生涯住宅研究所1999年4月))によると図書館は「リタイア後の住まいの徒歩圏に欲しい施設」の第6位に挙がっています。(病院 85.3%、スーパー 83.3%、郵便局 79.3%、銀行 75.0%、公園 60.7%、図書館 53.7%、書店 51.3%、レストラン 37.0%、コンビニ 35.3%、美容院 34.7%、喫茶店 34.0%)

また、内閣府が平成15年5月に発表した『『多様なライフスタイルを可能にする高齢期の自立支援』に関する政策研究報告書』は、今後の高齢者施策の一つの方向を示したものとと言えます。この報告書は平成13年に策定された「高齢社会対策大綱」に示された「①多様なライフサイクルを可能にする高齢期の自立支援、②年齢だけで高齢者を別扱いする制度、慣行等の見直し、③世代間の連帯強化、④地域社会への参画促進」の課題を受けて策定されたものです。この中で今後の高齢者の多様性を踏まえて、「活動的な高齢者」(健康上のも問題で日常生活に影響がない者)「一人暮らしの高齢者」「要介護等の高齢者」(健康上のも問題で日常生活に影響がある者)という3つ高齢者像を類型にして、それぞれに対応した施策の展開を求めています。

このように、図書館サービスの面においても今後の高齢者像を一面的に捉えてサービスを展開するのではなく、高齢者の多様性に合わせた施策を考えなくてはなりません。以上を踏まえ「高齢者全体に対する施策」そして「活動的な高齢者」、「要介護等の高齢者」への施策の三つに分けて今後の図書館の政策を提起します。

(1) 高齢者全体に対する施策

★高齢者の学習率を上げ、老人医療費を引き下げます

『高齢者の学習・社会参加活動に関する国際比較調査』(国立社会教育研修所 1997年)という「日本、韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、スウェーデンの6カ国の各千人(60歳以上79歳以下)」を対象とした大規模な調査は、その提言のなかで「高齢者は、健康だから学習しているのではなく、学習しているから健康なのである。学習をしていない高齢者のうち、健康上の理由でしていない人は6カ国全体でわずか11%であり、学習活動をしているのは健康だからということは一概にいえない。」と述べ、それを敷衍して「高齢者の学習・社会参加活動は、社会を活性化させ、財政的効果を生む。現在の日本の学習率およそ40%が、さらに5パーセント増えると老人医療費3894億円が、10パーセント増えると9086億円が節税できると試算しています。

従来「高齢社会白書」などの学習や社会参加の項では、高齢者を対象とした学級や講座などが大きく取りあげられていましたが、今後の高齢者を考えた場合には先に述べたように多様な価値観やライフスタイルを求める高齢者が増加することから講座型の学習よりも自己学習への要求が強くなるものと予測され、学習率の増加に対する図書館の役割もそれだけ重要になってきます。そこで、高齢者へのサービス

全体の大きな目標を「高齢者の学習率を上げ、老人医療費を引き下げる」ことに置きます。

まず、全体的な施策としては次の3点を行います。

★大きな字の本を積極的に収集します

「高齢者の日常生活に関する意識調査」総務庁(平成11年)によると「日常生活情報について不満な点」のトップは「字が小さくて読めない」で14.5%にも及びます。(「特に不満はない」が58.9%)その他には「どの情報が信頼できるかわからない 8.2%」「情報量が多すぎる 7.6%」「必要な情報が乏しい 6.2%」などが挙がっており、大きな文字への要望が大きいことが分かります。)

★高齢者の欲しい情報、タイムリーな情報を提供します

『「定年後の社会参加のしくみづくり」への提言(案)』(墨田区定年後セカンドライフ検討委員会 2003年3月)の中で「欲しい情報・タイムリーな情報を収集しにくい」という問題が9つの問題点の一つとして挙げられています。こうした情報こそ図書館がインターネットや地域情報を収集することによって積極的に提供します。

★施設のバリアフリー化を進めます

高齢者が図書館に来館したときに利用しやすいようにします。(ハートビル法)

(2) 活動的な高齢者への施策

★就業に関する情報や機関を紹介し就業への支援を行います

★学習・社会参加活動への支援を行います

「社会生活基本調査平成13年度」(総務庁)によると65歳以上で「学習・研究(学業以外)」を行った人は36.2%で5年前の調査より5ポイント上がったが、一方「趣味・娯楽」を行った人は85.9%で5年前より4.6ポイント低下したという結果が出ています。「学習・研究」の行動者率は「パソコン等情報処理」が15.9%、

「英語」が9.8%、「芸術・文化」が9.5%、「家政・家事(料理・裁縫・家庭経営等)」が9.1%となっていて、高齢者のパソコンへの関心の高さが伺えます。こうした関心に答えるべく図書館においても関連の資料を収集するだけでなく、講習講座情報の提供や支援組織を応援します。(現在視覚障害者を対象としたパソコン支援ボランティア・グループがあるが、今後仕事上でパソコンを駆使してきた高齢者が増加するので、そうした人材を活用できる手だてを考えていく)

★ボランティア活動を望む高齢者に情報を提供します。また図書館に関わるボランティア活動に関する技術を提供したり図書館サービスへの協力についても積極的に受け入れます。

図書館サービス関連においても「音訳、点訳、拡大写本」など資料製作に関わる活動があり、今後そうした技術獲得への援助を行っていきます。また図書館で行っている子どもを対象とした「お話し会」「工作会」など、特別養護老人ホームなどでの「紙芝居」や「歌」などにも積極的に参加を呼びかけ、高齢者と子ども、高齢者同士のふれあいの場を作ります。

(3) 要介護等の高齢者への施策

★特別養護老人ホームなどの老人施設での貸出を行います

特別養護老人ホームに入所していたり、老人保健施設に短期入所している方、またデイ・サービスで来所している方を対象に、図書館がそこまで出向き資料の貸出を行います。

★老人施設で紙芝居やお話、歌などを行います

特別養護老人ホームなどに入所している方々は年々重度の方が増え、本などを読む方は少なくなっています。しかし、紙芝居やお話などを行うと、ほとんどの方が楽しんで下さいます。特に童謡などの歌は喜んで下さり、多くの方々が楽しんで下さいます。

現在注目を集めている「音楽療法」(「心に歌を 上」朝日新聞 2003年6月30日夕刊の記事による)は、懐かしい歌を皆で合唱するもので、歌を唄うことによって「病気になるにくくなった 38%、よく眠れる 38%、食欲が増した 25%」という結果が出ています。また参加者715人に感想を10の選択肢から挙げて

もらったところ「懐かしい時代に戻る 626人、心が安らぎ落ち着く 498人、すっきりする 426人」というような効果があったといえます。こうした活動に子どもから高齢者まで様々な人に関わってもらえるようにします。

★一般の本では読むことの困難な高齢者に本を読めるような形にして提供します。

現在、池波正太郎の「鬼平犯科帳」の拡大写本は特別養護老人ホームや老人クラブなどで大変人気があります。読みたいけれども普通の本だと字が小さくて読めないという方が多くおられます。そうした方にとって大活字本や拡大写本はなくてはならないものになっています。また、寝たきりの高齢者の方は、本をテープに録音した「録音図書」を利用されています。このように今まで障害者サービス用の資料として作成された録音図書や拡大写本を積極的に活用します。

★図書館まで来館が困難な高齢者には資料を自宅に届けます

★痴呆性高齢者のケアのためのものや資料を収集し貸し出します

痴呆性高齢者の方が昔を思い出すことによって記憶や言葉を取り戻していく事を目指した「回想法」というケアがあります。たとえば、昔の日常生活用具(湯たんぽ、洗濯板、五つ玉のそろばん、もんぺ、食器、尺のものさし、かや)、昔の玩具(こま、めんこ、たこ、羽子板、人形など)、防虫剤の樟脳など、においのある物、さまざまな手触りの布、昔の葉書やポスターなど、ケアに必要なものや郷土に関する資料、ビデオ、録音された物売りなどの声、昔の新聞などの資料を積極的に収集し高齢者施設と協力して提供します。

4、文京盲学校および葛飾ろう学校生のインターンシップ

A. 文京盲学校2年生Kさんのあずま図書館での職場体験実習(2007年8月1日～3日)

文京盲学校2年生のKさんが8月1日から3日の3日間、あずま図書館で職場体験実習を行った。以前日本図書館協会の障害者サービス委員会で一緒だった、担任のN先生から半年ほど前に話があり、引き受けることになった。彼女は身体障害者手帳1種1級、未熟児網膜症で右眼が光覚弁、左目が手動弁で点字使用。大学進学を希望し、将来は英語の教師を目指している。今回は立教大学の実習生Sさんが8月1日から2週間実習するので3日間一緒に実習をすることになる。従ってそのようなカリキュラムを組んだ。

B. 文京盲学校Yさんのインターンシップ(2009年8月4日～5日)

(白百合女子大学の2名の実習生と一緒に)

Yさんは身体障害者手帳1種1級、未熟児網膜症で右眼が光覚、左眼が0.02で点字使用。弱視の生徒は企業等のインターンシップで受け入れられるが、全盲の生徒はなかなか受け入れ先がないという。今年の日野市立、豊島中央、文京区真砂、墨田区あずまの4つの図書館でインターンシップを受け入れたとのこと。

C. 葛飾ろう学校Tさんのインターンシップ(2009年8月11日(火)～2009年8月14日(金))

Tさんは専攻科のデザイン系で学ぶ高校2年生。3歳で失聴し、小学校4年生まで地元の言問小学校の「聞こえの教室」に行き、5年生から江東ろう学校へ行き、中学から現在まで葛飾ろう学校に在籍。小学5年生の時に江東ろう学校で初めて手話に出会う。従って日本語対应手話は出来るが日本手話は分からないという。